

テーマ：ショパンの作品にみられるバロック様式の受容
——《幻想ポロネーズ (Polonaise-Fantaisie)
変イ長調 op.61》を通して——

発表：田中 牧子（武蔵野音楽大学大学院修了／ピアノ講師）

要 旨

本研究は、ショパンの晩年の傑作《Polonaise-Fantaisie op.61》をテーマに選び、筆者が教会のオルガニストとして、パイプオルガンで学んできた奏法や知識を生かして、この作品の中に見られるバロック的な要素について明らかにすることを目的とする。

ショパン（1810-1839）は、ポーランドのマゾフシェ地方〈ジェラゾヴァ・ヴォラ〉に生まれ、生涯ポーランド民俗音楽を用いた作品を残している。ワルシャワ時代に、V.ジブニー、J.エルスネル、W.ヴェルフェル氏より教えを受け、オルガン奏法も学んだ。1825年より一年間ワルシャワの聖ヴィジトキ教会におけるリツェウムのミサでオルガニストを務めた。

バロックという語はポルトガル語の「いびつな真珠 (barocco)」に由来する。バロック時代とは16世紀末から18世紀半ば頃であり、その性格は例えば絵画や建築の豪華絢爛な表情の豊かさに現れている。バロック音楽の特徴として次の3点があげられる。①幅広い Affekt（情感）—愛、喜び、希望、悲しみ、怒りなど—の表現②Figure（音型論）、修辞法（レトリック）、数の象徴、調性格論などに基づいた作曲法。③通奏低音（奏者が低音旋律と数字に基づいて、即興的に伴奏部を弾く事）の様式。

〈ファンタジー〉というジャンルは歴史が古く、各国で異なった発展がある。ロマン派の作曲家達はファンタジアを、即興的な素材から明確な形式を持つ作品へと完成させていった。

今回取り上げるのは、以下の4項目である。

- ① 多声書法；ショパンは、J.S.バッハの作品をV.ジブニーより学び、フーガ、カノン等を含む対位法的書法を晩年の作品に反映させている。
- ② 運指法；鍵盤音楽には古い運指法の歴史があるが、特にオルガンには独自の奏法があり、指の置き換え、交差、グリッサンド等が挙げられる。
- ③ コラル書法；コラルとは宗教改革者M.ルター等により生まれ、教会にて全会衆により歌われる四声体の賛美歌のことである。ショパンは楽曲の中で、この書法を用いている。
- ④ 装飾法；装飾音はグレゴリオ聖歌の当初より、重要な役割があった。前打音、後打音、トリル、アルペッジョ、ターン、経過音等、バロック期の装飾法が、この作品の中でも多く現れる。

実際の楽譜（Polonaise-Fantaisie op.61）を参照しながら、考察して行きたい。